論文内容の要旨および審査の結果の要旨

氏名（本籍）	國枝利久（京都府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第二四号
学位授与の日付	平成六年三月二二日
学位授与の要件	学位規則第六条該当者
学位論文題目	『続撰吟集諸本の研究』
論文審査委員	主査　教授　穐田定樹
	副査　教授　前田正人
	副査　教授　清水克彦

一、論文の概要、および、各章別審査所見

中世歌壇史は、①鎌倉期②南北朝期③室町期に分けられる。そして、室町期は、前期と後期に分けて把えるべきであろう。

即ち、室町前期は、歌壇と足利幕府との関わりを深めた時期で、当然、幕府に忌避された歌人たちは不遇であった。そうした時代に活躍したのが正徹や心敬であった。これに対し、後期は、延徳年間以降、京洛にあって和歌の指導をうけた守護大名や被官たちが任国に帰国し、地方歌壇が相次いで形成される趨勢のなかで、京洛にあっては、足利義政・飛鳥井家・両冷泉家・三条西家・徳大寺実淳・僧侶歌人たちが活躍し、歌壇史に光芒を放った時期である。

ところで本論文は、その室町後期にまとめられた続撰吟集諸本についての研究である。

続撰吟集は、本論文の序に述べられている如く、応永・永享頃から天文年間に及ぶまでの三十首歌・百首歌・御会歌・月次歌・法楽歌等を中心に三四五〇余首を収録した私撰集である。その上位入集歌人は、飛鳥井雅世（八六〇首）・三条西実隆（五六三首）・後柏原院（三五二首）・下冷泉政為（一八七首）・姉小路済継（一三六首）・下冷泉持為（一三三首）・正徹（一一首）・足利義政（一〇五首）・上冷泉為広（一〇二首）等、室町期歌壇の錚々たる歌人たちである。

また、それら三四五〇余首を、現存する室町歌人たちの私家集や内裏歌会類の詠と比較・精査してみると、多くの一致歌が認められる。しかしまた、それら私家集等にはみえない和歌――いわば新資料ともいうべき和歌がすこぶる多く収録されている集である。

即ち、著者の指摘の如く、続撰吟集は、まさしく室町期和歌文学研究資料の一大宝庫というべき歌集である。

そこで本論文の著者は、続撰吟集諸本研究の基礎的作業として、近衛家に襲蔵されている陽明文庫蔵本（八冊本）を全文翻刻し、同じく八冊本系諸本（宮城県立図書館蔵本・国立国会図書館蔵本・神宮文庫蔵本）間における本文異同・所収歌の排列異同や各所収歌の私家集収録の有無等を精査の上、

①八冊本系諸本の紹介とそれら諸伝本の内蔵している問題点――第一章――

②八冊本系諸本と三冊本系諸本との関係――第二章――

③続撰吟集諸本と飛鳥井雅世集との関係――第三章――

④八冊本続撰吟集各巻の構成よりみた続撰吟集八冊本系第二類本の性格　――第四章――

⑤続撰吟集諸本と近世類題和歌集との関係　――第五章――

等について、詳細に調査し、緻密な検証を、実証的方法でこころみている。

以下、各章における著者の考察要旨を紹介し、論評を加えることにする。

第一編

第一章

現在までに著者の調査した続撰吟集の諸伝本十九本（井上宗雄・樋口芳麻呂両氏所蔵の残欠本を除けば、現存する全ての伝本ということになる）を、その冊数・巻序・各巻の収録歌数・奥書その他から次の如く分類している。

㈠　八冊本系諸本

(ア)　一類本系

陽明文庫本・前田家尊経閣文庫蔵本・国立国会図書館蔵甲本・聖護院蔵甲本・聖護院蔵乙本

(イ)　二類本系

宮城県立図書館蔵伊達文庫旧蔵本・神宮文庫蔵本

＊八冊本系の残欠本

東京大学付属図書館蔵甲本・宮内庁書陵部蔵高松宮甲本・水戸彰考館蔵本・国立国会図書館蔵乙本

㈡　三冊本系諸本

内閣文庫蔵甲本（内藤風虎旧蔵和学講談所本）・内閣文庫蔵乙本（昌平坂学問所本）・宮内庁書陵部蔵甲本・宮内庁書陵部蔵乙本・宮内庁書陵部蔵高松宮乙本・臼杵市立図書館蔵本

＊三冊本系の残欠本

東京大学付属図書館蔵乙本

㈢　類題本系（版本、一冊本）

静嘉堂文庫・陽明文庫等に各所蔵

続撰吟集の諸本を上掲の如く整理・分類した上で、八冊本系諸本を陽明文庫蔵本と比較・紹介しつつ、各諸伝本の内蔵している問題点を鋭く探り、提示し、検証・考察をこころみている。著者の指摘したそれらの問題点のいくつかを次に掲出してみる。

(a)　陽明文庫蔵本と徳大寺実通自筆とみなされている前田家尊経閣文庫蔵本とを比較してみると、巻二に所収歌排列上の異同が認められることを指摘。

その箇所の所収歌につき、歌題の排列および詠歌年次について検証をおこなうとともに、飛鳥井雅世集との比較から、尊経閣文庫の場合を錯簡と断定。その結果、陽明文庫本は尊経閣文庫の錯簡を補正した伝本、もしくは徳大寺家に温存されていた手控本を書写した伝本か、と一つの問題を提起している。前田家尊経閣文庫蔵本を伝実通筆の故に無条件に最善本とはみなさず、陽明文庫蔵本の性格をも鋭く追究しているところに、あり得る場合のすべてを想定して問題の解決に迫

り、安易な解決に甘んじようとはしない著者の研究姿勢の一端が如実にうかがえる。

(b) 神宮文庫蔵本は、陽明文庫蔵本と比べてその巻序・所収歌の排列・歌本文に異同の認められること、系統的にはむしろ宮城県立図書館蔵本（第二類本）に近いことを指摘。また、この伝本の各冊初葉に「林崎文庫」の長方形朱印のほかに、内藤風虎（元和五年～貞享二年）の蔵書印である「牘庫」の印の押されているところから、著者は、この伝本を近世の初期の写本と認定。また、国立国会図書館蔵乙本の三三丁（表）にも、この神宮文庫蔵本の紹介されていることを指摘。

(c) 宮城県立図書館蔵本の第二冊巻末の本奥につづいてみえる「異本ニ　右以石川主殿頭本書写之　云々」の記述から、

ア　この伝本は寛永六年初冬以降の写であること、

イ　校合に用いた異本は、北畠親顕が寛永六年初冬以降にまとめた三冊本であること、

ウ　高松宮蔵乙本（三冊本）の下冊二七丁表から同丁裏にみえる記述と、宮城県立図書館蔵本巻二の巻末の問題の記述とが一致するところから、校合本として用いられた一本は高松宮蔵乙本であったこと、

を推定。

この推定は、諸本を緻密に調査した上での見事な卓見といえよう。また著者は、問題のこの記述を手がかりとして、三冊本成立の経緯を第二章で検証しようとしている。即ち、著者は、諸本研究において、各伝本にみられる記述が、各々の伝本の性格を把握する上でいかに重大な意味を有するのかということを、論証してもいるのである。

(d) 東京大学付属図書館蔵甲本は、六冊本であって、陽明文庫蔵本と比較してみると、巻四、巻八の両冊を欠く伝本ではある。しかし、この伝本の第三冊をさらに精査してみると、その一五丁と一七丁との間に、陽明文庫蔵本の巻四の一丁分（一三八七歌～一三九七歌を記載）の合綴されていることを発見。本来はこの甲本も八冊本系の完本であったと断定。

以上の如き検証は、諸本研究を長年にわたり続けてきた研究者の目によってこそ、可能であったといえよう。特に、東京大学付属図書館蔵甲本が本来八冊本系の完本であったという著者の断定は、今後、続撰吟集諸本の研究を進める上で、貴重な発見である。

さらに著者は、この伝本において、いま一つ重要な指摘をしている。それは、この甲本第一冊の一〇七・一〇八両歌に付された特殊な記号の意味するところを追究したことである。即ち、これら両歌が実隆の家集の雪玉集（寛文十年刊）や書陵部蔵桂宮本再昌草にも収録されているところから、両歌の詞書を比較し、実隆の家集の詞書の表現の方が適当であることを指摘した上で、この甲本の書写本は、書写の過程で、これら両歌の詞書に異同の生じていることに疑義をいだいて符号を付したのではないかと推測している。この符号の追究は、続撰吟集が未整理なままとめられたことを示す、重大な指摘であることは間違いあるまい。

残欠本の調査に際しての著者の鋭い考察方法は、次の伝本の検証に

おいても発揮されている。

(e) 国立国会図書館蔵乙本（八冊本系の残欠本）は、表紙の左肩題簽には「さつきの雨」とあるが、実は、陽明文庫蔵本の巻七の三九一首（重出歌を含む）および、続撰吟集のいずれの伝本にもみえない詠であること、さらには勅撰集所見歌をも若干収録していることを緻密な調査の結果から著者は指摘。また、この乙本の三二丁表の五首目から三三丁裏の二首目までの部分は、

ア　陽明文庫蔵本と比べてみると歌の排列に異同の認められること、

イ　その部分の歌題も「納涼」「寄湊恋」「五月雨久」「秋夕情」「螢火透簾」というふうに続き、整然とは部立されていず、類題本系伝本に拠ったとも考えがたいこと、

等から、乙本の書写者は、書写にあたり、現存する続撰吟集とは別な伝本に拠ったものか、

と、著者は注目すべき問題提示をおこなっている。さらに著者は、この乙本の書写者が問題の部分の後に、類題本と神宮文庫蔵本とを紹介し、さらに、「此続撰吟抄ハ以上ノ書トハ別也」と記していることに注目。この記述は、上述の問題提示を裏付けるものとうけとめ、続撰吟集の別系統本の発見されることを期待するとしている。また、この乙本を続撰吟集諸本研究上、貴重な伝本であるとも意義づけている。

標題の「さつきの雨」はこの乙本の巻頭歌の歌題「五月雨久」に拠っているかとする著者の指摘をも含め、東京大学付属図書館蔵甲本の検証にあたった研究者の鋭い洞察力が、この乙本の検証からもうかがえる。

なお、残欠本ではないが、著者は、室町期の私家集を精査して、慈照院殿義政公御集の巻末に「続撰吟集中抄出」として三〇首を掲出していることを紹介。さらに著者は、これらの詠が現存する続撰吟集のいずれの伝本にみえないことや、国立国会図書館蔵乙本の調査結果をも参考にして、近世には、現存する続撰吟集の伝本とは別系統の伝本（異本）が存在していたことを推定している。この推定も、室町期私家集の研究に多年専念してきた著者によって提示された創見として注目される。

第二章

著者は、三冊本系諸本のうち、書陵部蔵高松宮乙本についてまず紹介。その伝本の内蔵している問題点を諸本研究上から鋭くとらえ、提示している。即ち、この伝本の巻七（下冊収録）の末にみられる記述や巻五（上冊収録）の末、巻八（中冊収録）の末にみられる記述から。

①この乙本は、北畠親顕が、石川忠総所蔵本を書写した伝本であること、

②寛永六年初冬の頃から翌七年五月にかけて、陽明文庫蔵本の巻序でいえば、巻七→巻二→巻一→巻六→巻五→巻八（巻二、巻四については判断しがたい）という順に書写されたものであること、

③八冊本系続撰吟集に収録されている所収歌のうち、他本にすでに収録されている後柏原院・実隆らの和歌約六〇〇首を除棄して三

冊本にまとめたこと、

④宮城県立図書館蔵本の第三冊巻末に「異本ニ」として校合本に用いられた一本は、この乙本であったこと、

を指摘している。また著者は、そのように推定した上で、この乙本巻七の末の「後柏原院御製十三首逍遙院廿首在他本之間除之　云々」の記述をふまえ、この三冊本系諸本で除棄された約六〇〇余首につき、各歌人の私家集その他――柏玉集・再昌草・永正五年七月二十六日三首懐紙等――を調べ、それらに収録されている詠であることを確認し、③の推定を実証的な方法で確かなものとしている。

また著者は、宮城県立図書館蔵本で異本校合している箇所を掲出し、陽明文庫蔵本・高松宮乙本のその箇所とを比較・表示。宮城県立図書館蔵本において異本校合として掲げている異本は、ほとんどの場合、高松宮乙本のそれと一致していることを示し、④の認定を実証的な方法で確かめている。

さらに著者は、宮城県立図書館蔵本において、異本校合をおこなっている箇所については、高松宮乙本の歌題・歌本文は陽明文庫蔵本のそれとはほぼ一致していることから、両伝本間には深い関係のあることを指摘するとともに、陽明文庫蔵本と宮城県立図書蔵本とは、同じ八冊本系とはいえ、お互いに別系統本であることを指摘している。

章末には、三冊本諸本の各巻における所収歌数・歌の排列異同等を表示。これまた、歳月を費しての調査に基づく労作である。一方、除棄歌についても、三冊本において除棄された歌人およびその歌数を八冊本における入集状況調査をふまえて表示するとともに、備考欄には、八冊本所収歌のどのような詠が残されたかということも注記している。そして、八冊本において第一位の入集歌人飛鳥井雅世の詠八六〇首からは、何故か一首も除棄されていないことを、今後の研究課題として提示もしている。

この章においても書誌的研究をふまえた深い考察がなされているといえよう。

第三章

著者が第一章――八冊本系の諸本――において、折にふれ指摘している如く、続撰吟集と飛鳥井雅世集とのかかわりは、きわめて深いのである。著者は、本章においてこのことを検証するために、まず、

①飛鳥井雅世集と続撰吟集との一致歌を精査・表示

②雅世卿集と続撰吟集との一致歌を精査・表示

という、基礎的な作業を行っている。その結果、続撰吟集とのかかわりは、雅世卿集よりも飛鳥井雅世集に顕著となることを指摘している。さらに①と②の比較によって、

ア　飛鳥井雅世集には収録されていない続撰吟集収録歌八二〇歌・二九七七歌の両首が、雅世卿集には収録されていること

イ　二九七七歌は続撰吟集のいずれの伝本においても、歌題のみで歌本文を欠いているが、その歌本文は、雅世卿集によって確認が可能となったこと

をも指摘している。続撰吟集において、歌題のみ記されている二九七七歌が雅世卿集に収録されていることが確認されたことは、雅世の研究を進める上で、重要な指摘であるにちがいあるまい。

以上の如き検証は、本論文第二篇――翻刻と脚注――からも明らかなごとく、続撰吟集所収歌三四五五首と私家集との一致歌の調査という、気の遠くなる程の単調な作業をふまえた結果なされているのである。①②を表示していることは、実証的研究のあり方を提示しているともいえる。

さて、著者は、飛鳥井雅世集と続撰吟集とのかかわりの深さをさらに検証すべく、八冊本系諸本（聖護院蔵乙本・東京大学付属図書館蔵甲本・尊経閣文庫蔵本）ならびに三冊本系諸本（高松宮蔵乙本・内閣文庫蔵甲本・同乙本・宮内庁書陵部蔵甲本・同乙本）等との本文校合をも行い、その結果を表示（③）している。著者は、続撰吟集に収録されている雅世の詠八六〇首全てを、現存する続撰吟集の伝本一九本と本文校合を行うべきであるとし、この点において、この表示は、未だ不充分なものであると述べている。しかしながら、続撰吟集と他の私家集とのかかわりを検証する方法を提示しているという点からは、やはり高く評価すべきである。

著者は以上の基礎的作業によって、三冊本系続撰吟集の成立過程・八冊本系諸本ならびに三冊本系諸本の特色を的確に把握し、八冊本系諸本が一類本（陽明文庫蔵本・尊経閣文庫蔵本・国立国会図書館蔵甲本・聖護院蔵乙本）と、二類本（宮城県立図書館蔵本・神宮文庫蔵本）に分類できると指摘している。その上で、表示（③）の結果をもふまえ、飛鳥井雅世集の編纂資料として利用された続撰吟集との一致歌を調査することが、続撰吟集諸本の研究に不可欠な作業であることを、著者は本章において実証してもいるのである。このような著者の研究態度は、まさしく諸本研究の範として、後進研究者の指標となるに足るものと言えよう。

第四章

続撰吟集三冊本系諸本は、八冊本から約六〇〇余首を除棄することにより誕生したのである（第二章）。

三冊本の編者・北畠親顕はそれらの多数の除棄歌をいかなる基準によって決めたのか――この素朴な、しかしきわめて重大な問題を、著者は、八冊本各巻の構成を、次の諸点から分析し検証して解明しようとしている。

ア　八冊本構成表の作成

イ　年次表記からみた各巻の完成度

――他の私家集との一致歌調査による詠歌年次の検証――

ウ　各巻における歌会・百首歌等の収録状況

エ　私家集以外の諸資料、例えば「一人三臣詠」・「内裏御会」との一致歌調査による詠歌年次の推定

オ　構成表からみた八冊本系諸本の巻序の考察

八冊本の構成については、著者も本論文において紹介しているように、五十嵐金三郎氏が、国立国会図書館蔵本により作成していられる。本論文において、著者がその構成表の補正を行うには、上記の如く、イ続撰吟集と他の私家集との一致歌調査、さらに、エ新資料との一致歌を確認する、という、長年に及ぶ地道な努力があったことはいうまでもない。その結果、補正された構成表により、八冊本各巻の完成度――歌会・百首歌等の排列状況・詠歌年次からみた歌の排列状況

による各巻の構成――が明らかにされたのである。この検証がなされたことにより、第一章で紹介された八冊本系諸本間の巻序に異同の生じた根拠を明らかにすることが可能となったのである。

即ち、宮城県立図書館蔵本の巻序は、陽明文庫蔵本のそれとを異なっているが、構成表からみると、宮城県立図書館蔵本は、むしろ、完成度の高い巻の順に巻序を改めたと考えられる、という著者の指摘は、以上の如き地道な検証の結実といえる。と同時に、宮城県立図書館蔵本がその校合本とした三冊本では、八冊本各巻の完成度の高い巻、即ち、巻二・巻八からは除棄がなされていないということが明らかにされている。

北畠親顕が、いかなる基準により八冊本から六〇〇余首を除棄したかという問題が、著者の以上の如き実証的方法によって解明されたことは、三冊本系続撰吟集研究上の問題の一つが解き明かされたことになるのである。

第四章の八冊本の構成表は、以上の点からも高く評価すべきである。

第五章

続撰吟集は、近世類題集に少なからぬ影響を与えていると著者は指摘している。「一字御抄」・「和歌分類」に収録された続撰吟集所収歌を表示し、今後の研究課題を提示するとともに、八冊本の資料的価値の高さを改めて指摘してもいる。

著者は、「続撰吟和歌集類題」の研究とともに、「一字御抄」「和歌分類」等近世類題集の研究の出版準備をも進めつつあるとのこと、一日も早い、その研究成果が期待される。

結　章

第一章から第五章にわたる検証、考察をふまえ、著者は本論文を次の如くしめくくっている。

①続撰吟集は実淳が蒐集しておいた歌稿類を中心に、公胤・実通らが蒐集し得た歌稿類を実通（あるいは公胤・実通父子）が八冊に編次した歌集であること。

②続撰吟集写本の系統は次のように考えられること。

・尊経閣文庫蔵本は実通自筆本である。

・陽明文庫蔵本は実通自筆本の手控本の写しである。

・聖護院甲本は石川忠総が所持することになった実通自筆本を中院通村が披見し、その門弟の道晃法親王が書写したものであろうと考えられる。

・三冊本は北畠親顕が八冊本所収歌から約六〇〇余首を除棄し、各巻の構成を考えた上で、八冊本の巻序を改め、三冊にまとめたもので、現存する三冊本は全て同系統本である。

③飛鳥井雅世集は、八冊本系の二類本（宮城県立図書館蔵本もしくはその系統本）によって編纂されたこと。

④近世類題集は、八冊本系の伝本を利用し、編纂されたと考えられること。

⑤続撰吟集には、秀歌が多く収録されていること。

また、続撰吟集は未整理な私撰集であることも指摘された。そし

て、今後、それらの秀歌を解釈・鑑賞する上で、さらなる諸本の研究・本文校訂の作業の必要性を強調している。

第二編

著者は、長い歳月をかけて、三四五〇余首を収録するこの続撰吟集を、諸本との本文異同をも示しつつ、翻刻。またそれら所収歌が、検索の結果、私家集その他にも収録されている場合には私家集名をも脚注に記している。その脚注はきわめて精密であって、私家集研究上、さまざまな問題を提示しており、中世歌壇史研究上必見の資料となろう。

和歌文学研究者たちから、鶴首してその刊行の待ち望まれている所である。

二、審査所見総括

(1)この研究は諸本研究であるが、従来全く未開拓にひとしかった作品を対象として行われ、かつ、著者としても未発表の研究であるという点に、まず大きな意義がある。室町時代和歌文学の研究に必須の基礎を提供した大著である。その意義はきわめて大きい。その研究は、周到緻密、恩師谷山茂博士の実証的な学風を、みごとに継承結実させたものといえる。

(2)諸本研究は、ともすれば、単なる機械的な作業の結果としての本文異同を羅列するだけに終ることが多いが、著者の研究は、常に、原型の解明を志向し、著者のこれまでの和歌史研究をふまえた、深い理解・鑑賞力によって、対象への踏みこみに、きわめて独創的な鋭さを随所に発揮しつつ、厖大なデータを精確に分析し綜合して、対象の成立過程とその原型の解明とに、画期的な成果をあげ、しかも、到達したその高いレベルから、今後のこの分野の研究に、数々の重要な課題が新たに提起された。

以上、研究は、博士（文学）の学位を受領するにまことにふさわしい研究であると認められる。